

この度 JALSG Young Investigator ASH Travel Award に採用いただき、第 58 回 American Society of Hematology (ASH) annual meeting に参加しました。澄み渡るような青空が続いたサンディエゴでの、素晴らしく充実した 4 日間を振り返りつつ報告させていただきます。

私は済生会前橋病院血液内科の医員として勤務しています。まだ医師になって 4 年目、血液内科としてのキャリアは 2 年目と若輩者であり、次々に襲い来る疑問、問題に必死に食らいつきながら診療を行う日々です。そうして血液学の面白さ、大変さ、難しさのほんの一端をやっとわかり始めてきた中で、今回 ASH への参加の機会を頂きました。「海外学会の規模、雰囲気を肌で味わってみたい」ということと、「世界中で行われている臨床研究、新薬の開発などが、どのような視点から生まれてくるのか知りたい」ということをテーマに掲げ、成田発ロサンゼルス行き便に搭乗しました（準備が遅く直行便は取れませんでした。学会参加時は早めの手配をおすすめします）。

学会の規模・雰囲気としては、毎年諸先輩方が言われることですが、学会場の広さと人の多さに驚かされました。San Diego Convention Center 内の移動でも 10 分以上、加えて周囲のホテルでの行われるセッションもあり、1 日学会に参加するとかなり足が疲れます。またポスターセッションではビールやワインを片手に国も人種も異なる者同士が、フランクに、ときに白熱した議論をそこここで交わしており、日本の学会とは異なる雰囲気に衝撃を受けました。勇気を出して幾つかのポスターで質問をした所、私の辿々しい英語がなんとか通じて議論ができ、それだけで少し嬉しくなっていました。

期間中は主に education program を回りつつ、オーラルセッションや記念公演にも参加し、朝から晩まで学会漬けの日々を送りました。education program ではそれぞれの分野の author 達が最新の知識をわかりやすくレクチャーしてくれますが、中でも MPN のセッションでは JAK2、MPL、CALR などの driver mutation の有無での分類と病理像も合わせた考え方をわかりやすく説明してくださり、とても勉強になりました。またオーラルセッションでの発表では、それぞれの国の医療事情を背景としつつ、日常診療でのちょっとした疑問や感じた傾向をきっかけに臨床試験や興味深いデータへと結びつけていることに感銘を受けました。未熟な私は目の前の患者さんのことで手一杯になってしまいますが、その中で小さなことでも患者さんから学んだこと、気づいたことを無駄にせず追求していく視点、感性をもっと磨かなければならないと痛感させられました。

今回は少し英語で質問できたことに嬉しくなってしまった程度でしたが、今後は学んだことを糧に更に勉強や研究を重ね、いつか発表者側になって ASH へと戻って来たいと思います。そのために英語力を身につける必要も身にしてみても感じました。

最後になりましたが、今回の機会を設けて頂きました JALSG 支援機構の事務局ならびに先生方、加えて多忙な中学会に快く送り出してくださいました済生会前橋病院の先生方にこの場を借りて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。